

地域活性化という「遊び」⑧

京都市
福知山市 「みわ・ダッシュ村」から

山本晋也

鶏を屠殺して解体する

田舎でできるリアルな体験から学ぶ子供たち

「ラーメンが食べたい」と子供たちが言っても

限界集落からは車で1時間近く

行かないといけないし

3歳くらいから

ナイフも包丁も持ってもらうって

おやつだろうが

ご飯のおかずだろうが

「食べたいものがあつたら

自分で作ってね」

というのが我が家の方針。

最近ちようど

卵を産まなくなつた鶏がいたので

「ラーメンだつたら鶏を捌くところ

からやってみたらどうだ」の提案に

「わーやるやる！ やりたい！」

と二つ返事。

「やるやる！」となつたら

あとは黙って放っておくのが

またまた我が家の方針。

彼らが小学生の時に

通つていた自然学校で

鶏捌きを少し体験させていただいた

ことはあるもの

一から十まで

というのは今回が初めて。

早速中高生の長男次男が

ネットを駆使して情報を収集。

必要な器具を揃えて包丁を研いだり

お湯を沸かしたりと

周到な準備をして

2時間後には作業開始。

親や学校の先生に言われると

時間がかかるのですが

自分たちのやりたいことを

やるとなると

なんと準備の早いことでしょう。

ネット動画で素晴らしいスピードで

捌くプロの映像を見ると

とても簡単そうですが

実際にやってみると

そう簡単にはいきません。

命をいただく行為に

ためらいがあるとどうしても

包丁を持つ手に力が入らず

一気に頸動脈が切れないので



放し飼いなので捕まえるのは一苦労

筆者プロフィール

1968年、京都生まれ。美術大学を卒業して渡米後、京都で現代美術作家として活動。そのかたわらオーガニックレストランを経営するも食材を種から作ってみたいとなり、京都市内で畑を始める。結婚して3人の子供を授かったころ、農業生産法人みわ・ダッシュ村の清水三雄と出会い、福知山市の限界集落に移住。廃屋を修繕しながら家族で自給自足を目指す。土と向き合ううち田畑と山や川、個人とコミュニティーの関係やその重要性に気がつき、田舎も都会もすべて含めた「大きな意味での自給」を強く意識するようになる。この考え方は、美術家時代にドイツの現代美術家ヨゼフボイスのすべての人々が参加して創り上げる社会彫刻という概念に影響を受けた。現在みわ・ダッシュ村副村長。

鶏は苦しがつてバタバタ暴れます。当然彼らの顔にも

血が飛び散つたりするのです。

鶏にはかわいそうですが

そうやって初めて子供たちも

これ以上鶏を苦しめては

逆にかわいそうと

包丁を持つ手にしっかりと力を入れる

ことを学ぶのです。

一番大変な屠殺を終え

血抜きをし、毛をむしつたら

一番大変な屠殺



一番大変な屠殺

ようやく
スーパードで見たことがあるような
いわゆるチキン
というような見てくれになって
子供たちもほっと一安心。
そして解体にかかるのですが
その時点でまだ肉が温かく
それにも驚いていました。
スーパードで買ってきた肉は
冷たいので
肉は冷たいものだと
思っていたというのです。
卵もそう。
スーパードの卵は冷蔵されて冷たいで



5歳の妹もしっかり見学



油が多かったので自分たちがやっていたエサが気に入り後で調べていました

すが生みたては温かい。

「いただきます」

毎日当たり前のよう

聞く言葉ですが

果たして

その意味を本当に理解している人が

どのくらいいるでしょうか。

親から教えられて

なんとなく繰り返してきたという

人がほとんどだと思います。

本か何かで命をいただく行為と

言葉の由来は知っていても

実際に経験し気づくという

ところからは程遠い感じがします。

解体の途中

脂肪のつき方や色で

鶏のエサや運動量との

関係にも興味を湧き

今後はエサも自分で

作ってみたいと考えていました。

このようなことでも

動物と植物のつながりに

自然と気がつくわけです。

■
コンピューターの発達で

映像や音響もますます進化し

テレビの映像なども

驚くほど実物に近くなって

実際に現場に行かなくても

その場の雰囲気味わえたり

実際に存在しないものを

あるように映し出したり
できるようになっています。

色々なことを

理解しやすくするという点で

とても素晴らしいとは思いますが

世の中がそのように進めば進むほど

実体験ということの重要性は

高まってくるのではないかと

思います。

■
コンピューター映像などバーチャル

リアリティーがなかった時代に

実物を見て触って感じて育った

今の大人がそれを見ると

どんなにリアルな映像でも

現実との区別はつきませんが

小さな頃から実物より多くの映像

などに囲まれて育つ子供を見て

現実と混同しないのかな？

と一抹の不安を感じるのは

僕だけではないはずですよ。

■
本物の命はゲームのように

簡単にチャージしたり

生き返らせたりできないのです。

■
先日地元の小学生が農業体験に来て

カボチャを使って種の話をした際

「みんなカボチャは知ってるよ

と思うけど種はどこにある？」

という質問に

「スーパード!!」と

自信を持って答える子もいました。

■
実際にカボチャを切って

種を取り出し数を数えたりと
話を進めていくと

種から芽が出て実がなって

また種ができる

ということがわかったようで

「じゃあなんでスーパードに種が売っ

てるの？」という疑問にまで

たどり着きました。

■
時代の流れとして

効率よく学習ができるよう

タブレットなどを導入するところが

急速に増えていくと思えますが

それはそれで大歓迎。

しかし合わせて本物を体験させる

ということの重要性を

忘れてはいけないと思います。

■
田舎でできるリアルな体験

バーチャルでできる効率的な学習

両方をうまく合わせて

地球の未来を創る人間を

育てていけたらと思います。



カボチャの種取り。数えたら400粒もあってびっくり、小学校の農業体験です